2023年7月23日　主日礼拝

説教題「『我が献身』の祈り」フィリピの信徒への手紙２章12～18節

主任牧師　加藤　誠

「わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成できるように努めなさい」（フィリピの信徒への手紙2章12節）。

今朝は「献身とはどういうことだろう？」という問いと共に、聖書に聴きたいと思います。一般に教会では、「献身」とは「福音宣教に仕える牧師や主事など教役者となる決意を神さまからいただき、すべてを後ろに置いて神学校に行くこと」を意味してきました。「献身」という言葉は英語の dedication という言葉の訳ですが、dedicate とは「専心する、人生をささげる」という意味があります。辞書を引くと用例として「彼女はその地域の平和のために人生をささげた」とか「彼は禅の研究に自らをささげた」とありました。深い覚悟をもって、自分のすべてを注いで何らかの働きに取り組むことを言います。「余暇を使って取り組む」程度のことは「献身」とは言いません。他のことは後ろにおいて全力で取り組むことを言います。ですから神学校への入学願書を出すに際しては、今している仕事を辞めて「退路を断つ覚悟」が求められ、教会はその決断と覚悟を「献身」と呼んできたのです。

今朝の礼拝で市川神学生が分かち合ってくださった証しは、そういう意味で「献身の証し」です。ただ、そのような「献身」は「深い覚悟」を求められるために、一般の信徒には「特別な事柄であって、自分には直接関係がない」という受け止め方がされてきたきらいがあるように思います。

けれども連盟の伝道者養成検討をする場で、「献身はそのように『一般信徒には関係ないこと』と切り離して考えて良いのだろうか？」という問いが示されました。先週も紹介したように、今から約四百年前の英国で、バプテスト教会は牧師だけでなく信徒一人ひとりの献身において誕生しました。例えば 1640 年にブロードミードという町に誕生したバプテスト教会は、納屋に集まったたった「５人」のメンバーで始まりました。教会といえば立派な礼拝堂があるのが当たり前、人は皆生まれると同時に自分の住んでいる地域の国教会のメンバーに登録されるのが当たり前だった時代に、その「５人」は英国国教会から離脱する深い決意をもって日曜日に納屋に集まり、礼拝を始めたのです。「５人」はそれぞれに家族や地域との関係でさまざまな緊張を覚悟して参加したことでしょう。「牧師一人の献身」ではなく「信徒一人ひとりの献身と闘い」においてバプテスト教会は誕生したのでした。

前述の連盟の伝道者養成検討の話し合いでは、ある方がこう語られました。「自分は普段、鉄工所で鉄を切る仕事をしている。けれど、その暮らしの中で毎週の日曜日を神さまを礼拝する日としてささげていくこと。この世の中のいろいろな闘いの中でクリスチャンであることを選び取っていくこと。それが自分の献身だと思う」と。四百年前だけでなく、今日もバプテスト教会は、「信徒一人ひとりの献身」の祈りの深まりによって、初めて建てられていくのではないでしょうか。

そもそも主イエスは弟子たちに「わたしに従ってきなさい」と声をかけられました。そして召天に際しては「地の果てに至るまで、あなたたちはわたしの証人として立てられる」という使命を弟子たちに託されました。クリスチャンとして生きるとは「日々主イエスに従うこと」であり、人々の言葉があふれるこの世界で、主イエスの十字架が指し示す神の国の愛と正義を選び取り、自分の言葉と行動で証ししていくことです。聖書を知らない人々のただ中で日々聖書の価値観を大切に選び取っていくことは、厳しい葛藤と緊張と闘いが伴うものであって、牧師に求められる「献身」とも重なる、地続きの「献身」と言えるのではないでしょうか。

そのような「献身」についての問いを思い巡らす中で、今朝のフィリピ２章の聖書を示されました。使徒パウロはここでクリスチャンとして生きる私たち全員に「救いというゴールに向かって私たちには取り組むべきこと／努力すべきことがある」（12 節）と語りかけています。「救いの達成のために努力すべきこと」とはどういうことでしょうか。そもそも信仰は、私たちの努力で獲得できるものではなく、神さまの恵みのプレゼントです。先週のマタイ 16 章でも主イエスの前で信仰告白したペトロに主イエスは「あなたにこの信仰をお与えになったのは天の父なる神だよ」と言われました。さらに主イエスは、ペトロの弱さ（人々の間で信仰告白を貫けず、「イエスなど知らない」と言ってしまう罪）を引き受けて、執り成し祈ってくださいました。私たちの信仰は、神さまの恵みに始まり、主イエスの執り成しと救いの宣言において毎日いただき続けていくものです。だとすると、そこで私たちが努力して、取り組むべきこととは何なのでしょうか。

今回、「献身」という言葉の意味を思い巡らし、さらに「救いの達成」ということを思い巡らす中で示されたのは、私たちが努力するように招かれているのは、この世界の中で十字架に示された神の愛を「受け取り続けていく闘い」ではないか…ということです。この世界には「ほんとうにいるのか分からない神なんかを信じるなんてバカらしい」「神の愛なんて面倒くさいことに縛られないで、自分のやりたいことをして生きてどこが悪いの？」という声であふれています。主イエスから目を離してしまうと、たちまち人々の声の荒波の中に沈んでしまうような信仰の小さな、弱い私たちがいます。そんな私たちがする「証し」というものも、格好のよいものとはいえず、いろんな破れを伴った傷だらけの「証し」なのではないでしょうか。けれども荒波の湖に沈みゆくペトロを主イエスが手を延ばし引き上げてくださったように、「勇気を出しなさい。わたしは世に勝っている！」「わたしが生きるから、あなたがたも生きる！」と励まし続けてくださっています。どんな嵐の中にも変わることのない、主イエスの十字架にあらわされた「神の愛」の言葉を聴き続け、イエス・キリストという「灯」を受け取り、その「希望の光」に照らされ続けていく。私たちがそのような小さな闘いを自分の暮らしの中に選び取っていく時、どんなに小さく、破れと傷だらけの格好の悪い「証し」も「この世界において星のように輝くものとされていく！」（15 節）と使徒パウロは励ましているのです。